
一夜は永遠へとー

神崎泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一夜は永遠へと―

【Nコード】

N4520E

【作者名】

神崎泉

【あらすじ】

ある日、偶然出会った少女と少年の恋の話。一夜の出会いはずっと永遠へと変わる…。

愛してる。

その言葉は甘く、優しい。

アナタだけに贈る、とっておきの言葉…

あの日、いつもより一層街は夕日で赤く染まり、私は小高い丘でその街を見下ろし、涙を流していた。

「どうしたの？」

そう言って私の隣にやって来た少年は、何処か不思議な雰囲気を漂わせていた。

その少年は身長は低く。細身で、髪は黒。だが、瞳は神秘的なエメラルドグリーンで、美しい少年だった。

歳は私と同じ、中学生ぐらいだろう。

少年は、黙り込む私の顔をエメラルドグリーンの瞳で覗き込んできた。

私の涙が視界を揺らし、少年の整った顔も歪んで見えた。

嗚咽で喋ることは出来ず、私は涙を流しながら少年に向かって首を振ることしか出来なかった。

「…。」

少年はそんな私を見て、黙って指で私の涙に触れて、涙を拭いた。視界がはっきりして、少年を見ると少年は微笑んで私を見つめていた。

「ねえ、何があったの？ 話、聞くよ。」

少年は優しく私にそう囁き、沈み行く赤い夕日を見つめた。

私は、名も知らぬ少年に泣いていた理由を話すことにした。

「…。私、心臓に重い病気持ってるの。後、持って3ヶ月だって…手術すれば治るかもしれないけど、成功例も少ないらしくて…」

病気にかかって…だけど、すぐ治るモノだと思ってた。

だけど、言われたのは死の宣告か賭かだった。

私はそんな主治医の言葉を信じたくなって、現実を見たくなくて、病院から抜け出したのだ。

そして、今に至るワケだ。

「…。で、逃げてきたの？」

少年は真剣な眼差しで私を見つめた。

“逃げてきた。”その言葉がなぜか胸に突き刺さる。

私は少年の言葉に黙って頷いた。

「逃げて何か変わるの？」

少年は私にそう言って、夕日が沈んでいった方向を見つめた。

私も一緒にその方向に目をやった。

空はすでに暗く、街ではネオンが輝いている。

「私ね、恋ってしたことがないの。なのに、恋を知らずに死んでいくんだ。」

私はそう言って空を見上げた。

空にはすでに一番星が瞬いていた。

その一番星の光は小さく、今にも消えてしまいそうだった。

そう、私の命の灯火のように…

「じゃあ、恋は教えて上げられないけど…愛は教えて上げるよ。」

少年はそう言った。

私は少年の言葉に驚いて、一番星に向けていた視線を少年に向けた。

「∴。でも」

私が、でもまで言ったところで少年は指で私の唇に触れて

「でもない。君が答えるのは Yes か No」

少年はそう言って私の唇から指をどけた。

∴。愛。

その未知なる言葉の意味に、私の好奇心は惹かれていった。

「∴。Yes」

私はそう囁いて少年を見つめた。

すると、少年はにっこり笑って私の手を取った。

「それではこれから一晩、俺はアナタに愛を捧げます。」

そう言い、少年は私の手に優しくキスをした。

「僕は、紫苑。君は？」

「∴。光紀。」

こうして、私達は出会ったのだ。

その晩、私は紫苑に昔の話をした。

親、友達、学校…とにかく紫苑に私のことを少しでも知って欲しかった。

紫苑と居ると自然と笑顔になれた。

だけど、紫苑は少しも自分のことは話してくれなかった。

「…。紫苑、もう9時になったけど…おうちの人…良いの？」

私は紫苑を見て言った。

紫苑は私から視線をそらして、ネオンが輝く街を見下ろした。

その横顔は悲しそうで、寂しそうで…

「あのネオンの中の何処かに居るかな…」

紫苑は悲しげにそう囁いて街に背を向けた。

何処か…。

その言葉はどういう意味を持っているのだろうか。

「それって…」

私は少し遠慮気味に紫苑に聞いた。

紫苑はちらりとこっちを見て弱々しく微笑んだ。

「そ、親は俺を捨てて何処かに行ったんだ。そして、今は孤児院に俺は居るの。そして、その孤児院を抜け出して来た…だから、光紀と一緒に逃げてきた。」

紫苑はそう言って俯いた。

私の目には紫苑が泣いているように見えた。

「俺、逃げて何か変わるのって言ったけど…その言葉はそのまま俺に向けても言ってたんだ。」

紫苑はそう言って顔を上げた。

泣いていると思ったが、その瞳には涙ではなく、意志の強い光が宿っていた。

「でも、思ったんだ。光紀みたいに生きることでも凄く大変な奴が居るのに、親が居ないくらいで俺、何やってるんだらうって。」

そう言って紫苑は強い眼差しを私に向けた。

そして、私の手を取ってにっこり微笑んだ。

「俺、明日から頑張ってみる。親居なくても生きていける。だから

：光紀も諦めるな。死なないかもしれない道がまだあるならその道に賭けろ。俺がどうにかしてやる。」

そう言っただけ紫苑は私を抱きしめた。

抱きしめられて感じるのは、いつもより早い自分鼓動と、紫苑の鼓動。そして、紫苑の匂い。

今私は生きてる。だから抱きしめてもらえる：

そう思うとまた、涙が溢れてきた。

だけど、今度は悲しみの涙じゃなくて、感動の涙。

紫苑は私を離して、また黙って涙を指で拭ってくれた。

私と紫苑はそこで別れた。

暫く歩いていたら

「光紀。」

と紫苑に呼び止められた。

私が振り返ると紫苑は大きく手を振っていた。

私も精一杯振り返す。

「一年後。俺、強くなってるから。良かったらまたこの丘で会って。」

紫苑はそう言って走って行ってしまった。

その紫苑の後ろ姿はいつまでも私の目に焼き付いて離れなかった。

それから2週間後、私は手術を受け、無事成功した。

きつと、紫苑のお陰なのだろうと思った。

そして今、私は約束の丘に居る。

あの日のように赤い夕日を見つめて、一年で少し変わってしまった赤く染まる街を見下ろした。

「光紀。」

独りで街を見下ろす私に声をかけてきたのは

「……。紫苑。」

一瞬誰だか分からなかったが、その美しいエメラルドグリーンの瞳で分かった。

私とさほど変わらなかった紫苑は、すでに私より頭一つ分以上大きくなっていた。

一年で男の子は、こんなに成長するのかと軽く驚いた。

成長期とは恐ろしいモノだ。

「来てくれたんだ。」

声変わりもしたのだろう。前より低くなった、しかし耳に心地良いトーンの声で紫苑はそう言って微笑んだ。

私も紫苑に微笑み返した。

一夜の。そう、こんなに人がごった返す世界で出会えて、その短い時間で人生が変わった私達はきっと幸福なんだ。

病気だったのも、孤児だったのも、お互い出会うためだったんだよね。

この先の未来何が待っているか分からないけど…

あの一夜の出会い、永遠の出会いに変わったんだよね…

「…。紫苑。私は紫苑を愛しています。」

一年前のこの場所で言おうと決めた、この言葉。

紫苑はにっこり笑って私の手を取った。

「これから一生、俺は光紀に愛を捧げます。」

そう言って紫苑は、優しく私の手にキスをした。

＜epilogue＞

「ああー俺から告白しようと思ってたのに。」

キスをした手をそのまま繋いで、紫苑が赤く染まる街を見て悔しそうにそう言った。

「言った者勝ち！」

私はそう言って紫苑に向かって微笑んだ。

すると、紫苑の顔がみるみる赤く染まっていく。

紫苑はそっぽを向いて空いてる方の手で顔を覆った。

「…ねえ、紫苑顔赤いよ？」

私は、首を傾げて紫苑を見た。

手の隙間から、紫苑の美しいエメラルドグリーンの瞳が私を見つめる。

すると、紫苑が繋いでいた手を軽く引いた。

そのまま紫苑の胸に飛び込む形になってしまい、紫苑はすっかり私を支えた。

「うお、軽！」

紫苑はそう言って私を見つめた。

「ちゃんと食べてる？」

心配そうに紫苑はそう言って私の胸に腕をまわした。

って言うか…紫苑だって人のことが言えないぐらい細い。

だが、私はそんな体勢が恥ずかしくて。黙ってコクンツと頷くことしかできなかった。

すると、紫苑は何も言うことなく私に優しいキスをした。

今度は手じゃなくて、唇に…

「…な。」

不意打ちでビックリする私に、悪戯っ子みたいな笑顔を見せて

「早い者勝ち！」

と、紫苑は言った。

そして

「愛してるよ…光紀。」

っと私の耳元でそっと囁いた。

(後書き)

初めて短編でしたがいかがだったでしょうか？

話の構成が適当になって、更にまとめ方が無理矢理でした。

途中でだした台詞が特にまとめなかったの…

まあ、文才がないので許して下さい。

※分かってるなら直せよと言わないで欲しいです。

この作品は恋の話を書きたくなったので衝動で書きました。

とにかくハッピーエンドが書きたかったです。

この作品を読んで少しでも心が温かくなって貰えたら光栄です。

ここまでこんなショボイ作品を読んで下さって本当にありがとうございます。
ございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4520e/>

一夜は永遠へとー

2011年1月21日14時55分発行